

京鹿子

令和五年十月一日発行
通巻一九〇号(毎月一回一日発行)



10月号

鈴鹿呂仁

拾掬集 その九十七



花芙蓉名残りの雨に紅ほどく
白芙蓉風の吐息を聞いてゐる
苧殻火の軽きに足せり己が息
苧殻焚く家の七口開けておく
秋立てり堂宇に諭す弥陀の息
言ひ訳の伏し目流し目秋扇

穴まどひアップデートはあと五分
白桃の香りだす夜の身の震へ
鬼灯の媚は愛^{かな}しきシースル

吟行・嵯峨野界限

涼新たに二尊の印に心^{こころ}も無し
世を捨てて嵯峨野さらさら去来の忌
化野や風の骸を抱く真葛
竹の春風を誼に嵯峨孤愁
秋蟬のこゑを結んで直指庵

近詠

名譽顧問

和田 照海



しほさゐ

潮騒はいまもしほさゐ島の秋
干満の早瀬の渦や厄日来る
伊予嶺々澄みわたりたる夕白露
石白にひとつの穴や竈馬
聞耳を立て無住寺の蟻地獄

近詠

名譽顧問

塩貝 朱千



夜の雷

木洩れ日のベンチに先客黒揚羽
割り切つて残るものなし半夏雨
夏雲やタベ天女となりて舞ふ
ハザードマップに探す一点夜の雷
風抱けば斜め飛びもし萩の蝶

神麓集

近詠

福主宰

村田あを衣



蚊帳は水槽

合鍵は君の小箱へ梅雨明け
みづいろの塩をひと振り夏来たる
蚊帳は水槽子供は海の夢の中
波立てて畳まむ蚊帳へ子は魚
オルガンは山河の音色夕焼くる

秋が行く

沼田巴字

緑蔭

直江裕子

農法の機械になる世麦を蒔く
思ひ出の行方果てなし雪ぼたる
善悪にとまどふ勿れ雪ぼたる
福招く人に副ひけり秋が行く
ありし日の幸不幸かな鬮雲

トルソーに血が通ひ出す新樹光
梅雨しとど他国に足を踏み入れぬ
反逆がひそかに眠る緑蔭
老い少し梅酒の琥珀いよよ澄む
虫たちの空の入り口ねじり花

天高し

植村蘇星

黒日傘

高木晶子

さすらひに非ず秋蝶城巡る
竹落葉雀色時宙に舞ふ
天高し怒りや吾が損人の徳
天よ天森羅万象喜雨待てり
雨を待つ蟬の鳴き声弱々し

お目当を探しあぐねて紫陽花苑
決められし色でも自在夏の花
国訛弱々しくも半夏雨
何色で尽きるつもりと庭紫陽花
何人に煩はされず黒日傘

夏座敷 伊藤希眸

誰も居ない沢に花蓮咲き競ふ
孫曾孫集（よ）って相撲の夏座敷
西瓜切る遠いその日が目の前に
牡丹一花そのまま散りぬ夕べかな
夫の忌や声聞くやうな梅雨晴れ間

残り鴨 奥田筆子

住所録失せて孤鳥に残る鴨
衝動の連鎖果てなく夏落葉
梅雨晴や置ききし時間拭いてゐる
アドリブや水から拾ふ夏の月
水引草握手のための手紙です

神の旅 井上菜摘子

星飛んで父のドロップ減ってゆく
台本を逸れて夜汽車に神の旅
はればれと吹かれてをりぬ吾亦紅
うやむやのままに榎&Salid.の落し途中
次の世は笛を吹く人螢草

青 山中志津子

ほととぎす光とどかぬ流刑小屋
田植どき青に溶けこむ園児バス
子育ての燕に町を明け渡す
梅雨の雷戦がテレビ溢れ出す
鉾囃子に合はす心音リハビリ期

神麓集

青胡桃 鷺山珀眉

忍び音の山彦となるほととぎす
十全な高さ泰山木の花
青胡桃自分を急かすことなかれ
高塀は開渠に沿うて凌霄花
夕焼けて戦禍の嗚咽聞き洩らす

夏椿 亀井福恵

暑気中り因果などとは言ふまじく
咲きながら朽ちはじめたり夏椿
愁思また愁思を誘ふ半夏生
雑念を払ひて南瓜真二つ
山鳩のこ糸のくぐもる梅雨ぐもり

しづごころ 西村白杼

ハンモック宇宙の中にある私
雲海や大島小島丹後富士
余生とは前を見ることソーダ水
睡蓮や水を選ばぬしづごころ
ゆくも帰るも祇園囃子の只中に

更衣 菊池和子

半夏生昨夜の決断また延ばす
苔の花竜吟庭の黙の詩
今昔の音色を紡ぐ祇園祭
風鈴のよく鳴る風や雨催ひ
御来光雲湧く中の槍ヶ岳

神麓集

神麓集

硯海に満つる朝の日羽化の蝶
 骨壺へ懐紙に包む野紺菊
 橋の灯の湖に揺るがず夜の秋
 白秋や母の指して弥勒仏
 海鳴りや風紋となる鰯雲

鰯 雲 山 田 和



神麓集

扇風機いくさ二文字に首を振る
 世の旅の果ては何いろ合歡の花
 夜店の灯昭和恋しと影二つ
 夕やけ雲片側くらき野のほとけ
 噴水の水の一魂天の妣へ

朱の翳り 本郷公子

木洩れ日のプリズム遊びハンモック
 とかげ消ゆ砂紋無限の広がり
 蟬の殻脱ぎて七日の悟りかな
 病葉の白砂へ落ちて朱の翳り
 新そばに銚子一本指定席

噴水の一魂 安田優歌

五月雨の煙りて深き樹々の黙
 雨音を自在に染めて濃紫陽花
 雲海や小島の如く阿蘇五岳
 泣き声の風となるまでハンモック
 三度目は聞き返せずに夕端居

観蓮節 佐藤千恵

薄明のシャッターを待つ大賀蓮
 古代蓮ひらり卑弥呼の息づかひ
 匂ひたつ恋の予感か紅蓮
 今生の胸を浄めし白蓮
 蓮真白浄土しづかに陽の差し来

夕端居 石原孝人

豊田都峰 十句（昭和四十六年）

父の死後星こぼれつぎ雪季くる
凍雲や遺品時計の虚しき針
北風に鳴る湖北は雲を呼びつづく
春雪の吉田よくらき門構
たんぽぽ野一つの量を古墳とす
華やかに花を鎮めて鬼の祈舞
若芝の丘よまづしき影おかず
きもの展囲み青葉の陽のしづく
夏炉焚き落人村をすすけさす
古知谷のひるはかやつり草の風

（真由美抄出）

英華採集

誘蛾灯乗せられてゐる口車

福山 三輪 桜花

慣用句「口車に乗る」を辞書から引用すると「人の口先に騙される」「おだてに乗る」とある。日常の会話では最初の「騙される」は余り耳にしないが、「おだてに乗る」は多いだろう。人は持ち上げられて怒ることは無くついつい承諾する羽目になる。掲句の季語の誘蛾灯は取合せであるが、蛾そのものが誰かの口車に乗った、と見るのも面白い。昆虫の闇で起こる摩訶不思議な世界があれば、蛾を貶めんとする虫の類が甘い罠を仕掛けたのが「口車」である。

言訳のうまい金魚は人見知り

福山 藤井 杏愛

夏の風物詩としての夜の金魚すくいには、家族、恋人同士など楽しめる遊戯で例え一匹も釣れなくても何匹かお土産に持たせてくれる。持ち帰った金魚が部屋の中で家族の一員として飾られ馴染んでいる。毎日、眺めていると個々の金魚には、夫々特徴があることに気付いたのである。作者は、この金魚と家族の子供達と重ねて見ることにした。子供達にも夫々の個性があり、叱られても言訳の上手な子もいる。下五の「人見知り」が金魚に通じる。

でで虫や日にち薬と言はれても

和歌山 辻本 俊子

作者の俊子さんからお家の中で大きな怪我をされて入院生活を余儀なくされた、と聞いた。高齢になると怪我の治りも時間がかかり長引くようでありハビリも入れると相当の期間となる。非日常の事であればあるほど相応の覚悟がないと耐えきれないものも出て来るであろう。当然、医者と言葉である中七下五の十二音に耳を傾けるものの、心が折れるのも人の常というべきか。季語の「でで虫」と置いた作者の心中を察するに余りあるものがある。



京鹿子集

鈴鹿呂仁選

水琴集

山百合やひそと咲き継ぐ平家谷

和歌山

尾崎と代子

夕光^テに暮れのこりたる花あふち

恙なし笹百合湯屋に日を透かす

荒梅雨や川のほとりになす生活

白鷺の中空遠く点となる

無味といふ水の旨さや泉湧く

奈良

瀬尾千鶴枝

梅花藻や水のほひの宿場町

深吉野に北都恋しと道をしへ

還らざる昨日も今日も髪洗ふ

病院の手順に慣れる梅雨の明け

奈良

福岡 正一

紫陽花の暮れて軒端に寄る雀
紫陽花を咲かせ伽藍の余白埋む
蜘蛛の子飛ぶ風に委ねし新天地
幾度なく払へど蜘蛛の定置網
母旨し酸いも甘いも昔かな

雲海や山は孤島となり満つる

福知山

松山 潤子

海風のふところにゐてハンモック

戦士の碑拭へぬ曇り梅雨ふかし

一つづつ積みて下ろす荷植田風

晴れ女雨女ゐて梅漬ける

教科書の裏の落書ゆすらうめ

宇治

北田せい子

通園のバスはほと号ゆすらうめ

ほととぎす木曾十一宿を啼き継げり

雑念を消せず坐禅の堂暑し

沙羅落花清風まねく花頭窓

言訳のうまい金魚は人見知り

藤井

杏愛

廃線のレールを跨ぐ夏の蝶

竹の春母の書に成る中也かな

夏の山胸一杯に深緑

折鶴のはじめて折れて月涼し

でで虫や日にち薬と言はれても

和歌山

辻本

俊子

時々病窓かすめ梅雨鴉

蟬時雨元気の素を下さいな

尺蠖やどこまで行けど上には上

濁流の向かう濁世の梅雨商都

梅雨明けもお湿り欲しい八十路かな

戸田

遠山

悟史

食進む叩きキュウリの牡蠣油和へ

冷房を効かせ南方戦記読む

せせらぎの音まで美味し夏料理

片蔭を出でよと急かす青信号

福山

三輪

桜花

誘蛾灯乗せられてゐる口車

桜桃忌雨に少女の日の微熱

螢狩夢はみるもの願ふもの

草引くや共にゆづらぬ口喧嘩